ラジオ放送

＜平成24年10月～12月放送分＞

ON AIR

金光教の声

No.401

もくじ ～*contents*

＜信心ライブ＞

☞金光教の集会で行われた発表や講話などを紹介します。

●第1回　信心あればこそ～被災地の教会から　*page 1*

●第2回　ああ、神様に生かされている自分やなあ　*page 5*

●第3回　ブラボー！　命がつながった　*page 9*

●第4回　育子さんの宝物　*page 12*

＜先生のおはなし＞

☞金光教の教会の先生のお話です。

●この手のひらのぬくもりは
金光教今市教会　森山恵美子　*page 16*

＜信者さんのおはなし＞

☞金光教の信者さんの体験談を紹介します。

●ココロの散髪いたします　*page 20*

●母が残してくれたもの　*page 24*

●今あるいのちを振り返って　*page 28*

●神様はどう思っているんだろう　*page 32*

●笑顔で　*page 36*

●いつでもどこでも神様といっしょ　*page 40*

●あの言葉がなかったら　*page 44*

●琵琶湖の湖畔から　*page 49*

《信心ライブ》

第一回「信心あればこそ　～被災地の教会から」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

平成二十三年九月二十五日、宮城県松島市中央公民館で、金光教東日本大震災復興慰霊祭が行われ、その中で気仙沼教会の奥原志郎先生がお話をされました。

気仙沼教会は港の近くの高台にあり、大津波も、教会のすぐ近くまで押し寄せました。津波に浸かるまでには至りませんでしたが、地震で教会建物も損害を受けます。それでも気仙沼教会は、震災直後から、多くの被災者の宿泊所として開放されました。

教会長の奥原先生は、被災者の立ち行きを祈ると共に、信奉者の安否確認を震災直後から行い、ご神米という祈りのこもったお米を入れた紙包みを手渡し、被災された方々を励ましていかれます。そこから被災者の方々が、どう立ち直っていかれるのか、奥原先生のお話を聞いてみましょう。

…四月初めに、教務センターの所長が教主金光様からちょうだいした御神米をたくさん持参下さいまして、それを私は小分けに致しまして、被災された信徒の方々に安否確認と共に、その御神米をお渡ししていきました。

その中のお一人で、岩手県の大船渡という所

に住んでおります平田長治という方がございます。建具屋さんでございます。

その流された自宅のがれきの中で、何か作業をしておりましたけども、私が、「こういう訳で教主金光様から御神米をちょうだい致しました」と話しましたら、平田さんは汚れた手を自分のズボンでゴシゴシこすってですね、そして、私が差し出す教主金光様の御神米を押し頂くように、そして内ポケットにそれを大切にしまっておりました。

私はその様子を拝見しておりまして、「ああ、この方は、本当におかげを頂くだろうな」とその場で感じましたけど、果たしてそれから半月後、教会のご大祭にその家族がお参りしてまいりまして、こう申しました。「先生、中古の機械ではありますが、それを少しずつ買い整えて、建具の仕事を再開しようと思っております」と。「何と復興に向けての足取りが早いか」というふうに感心させられました。

その後、また半月後にその方の所を訪ねました。建具の仕事を一生懸命しておられました。教えの中にありますように、「有り難いと思う心はおかげの始め」だと、まさに教主金光様の御神米を有り難く頂き、内ポケットにしまう。まさに、有り難いと思う心がおかげの始め。立ち上がりの早いこともうなずける訳でございます。

もう一人は、同じく大船渡で民宿を経営している嘉志一世（きしかずよ）さんというご婦人がおります。あの三月十一日の震災以来、民宿に泊まって下さ

った多くのお客さんが、何とか早く民宿を立ち上げて欲しい。そして、仕事を始めて欲しいと、こういうふうに皆励ましてくれると。「先生、私はお客さんたちの期待を無にすることは出来ません。自分たちの住まいは後でも、何とか早く民宿を建てて、民宿を再開させてもらいたい」と強く願っておりました。今、その準備を一生懸命進めておるようでありまして。私もその民宿が開店するのを楽しみに待っているところでございます。

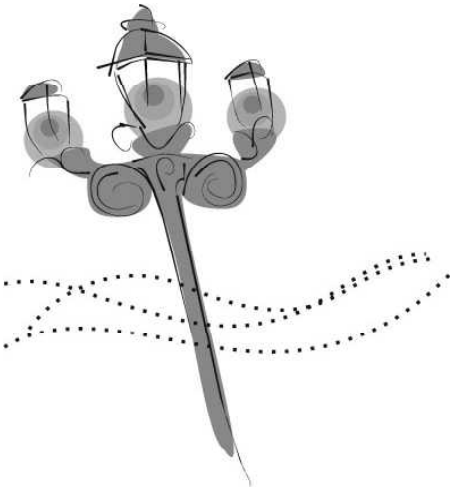
その嘉志一世さんが、こうもおっしゃっている。自分の娘が四月に結婚式を執り行う予定であった。従って、大勢の方をお呼びして、披露宴をするというふうなことで考えておった。しかも、お嫁に行く、その道具もちゃんとそろえておった。それが全て流されてしまって…。その娘は、各地から寄せられる救援品の中で、自分の着れそうなものをビニールの袋に詰め込んで、嫁に行ってしまいました。

母親の一世さんが言うには、「私はこれでいいんだと思います」と断言するんですね。こういう時で、津波に遭って、みんな大変だから、仕方がないから、これでいいんだというのではありません。自分自身が民宿でこれから一から始めて、神様のおかげを頂いてそうさせてもらうんだと。同じく、娘は好きな人と家庭を築き、二人で新しい家庭を築いていく。その出発。「一から始めるんだから、神様のおかげを頂いていくんだから、これでいいんだ」と、その母親は断言するんですね。私はそれを聞きまして、有

り難いもんだな。信心させてもらっている母親のこの力強い決意というものは、本当にこれは信心あればこその言葉だなというふうに、その時改めて教えられた次第でございます。

御神米を押し頂いて、「真に有り難し」と思う心で建具屋を再開した平田長治さん。また、「娘は着の身着のままでお嫁に行ったけれど、これでいいんだ、娘も民宿も一からの出発だ」と断言する嘉志一世さん。

今、被災地が立ち直ろうとしています。一日も早い真の復興を共に祈らせて頂きたいと思います。



《信心ライブ》

第二回「ああ、神様に生かされている自分やなあ」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

今日は、京都市にある金光教船岡山教会の大引実さんが昭和五十九年に金光教玉水教会でされた講話を聞いて頂きます。

ある教会の信者さんでございますがね、この方は子宮がん。入院されてですね、そして摘出をしてもらわれた。手術をされましてね。しかし、ひょっとしたら再発するか分からない。取ってもらっても、完全に安心だというところはいきません。保証できない、今日の医学でも。そういうところからね、毎日が不安です。まだお年が三十二歳。婦人の働き盛り。主人が、それまで勤めておられたんですが、商売させて頂くということで、お勤めを辞められましてね。そして、お商売を始められた。子どもさんが三人いてますねん。そこへもってきて、このご婦人が子宮がんでございましょう。もう毎日が心配。どう申しますかね…怖い、ね。怖い怖い怖い怖い。今日、目覚めたら、明日はどうなるか分からない。

大変な手術を受けられたこの方にしてみましたら、果たしてこのまま、「完全にあなたは良くなりました。大丈夫です」と太鼓判押してもらってるんと違うんですからね。不安なんです

ね。人間の生きていく上において、不安ということぐらい怖いもんはない。そうでございましょう。一体どうなるか分からない。

主人を置き、三人の子どもを置いて、もう居ても立ってもいられん、そういう時にこの方のお知り合いの方が、お手引きをされまして、お教会にお引き寄せ頂かれた。

一応治癒して退院はしたというものの、再発の可能性がある。そういう立場になったらね、もうお医者さんに掛かっていても、制がん剤を受けておりましても、どうにもこうにもならん。かなわぬ時の神頼みで自分が一生懸命すがらなけりゃどうにもならん。お参りさせてもらわれましてね、何とかして助かりたい。人間のね、究極の「何とかして助かりたい」。そういう願いを持って参られた。

その願いを受けられた教会の先生は、「人間というものはな、自分の力や考えで生きておるんと違うんですよ。たとえ病気を患うておってもね、病気を患うておっても痛いということが分かる、つらいということが分かる。これね、生きてる証拠だ。生かされてるんですよ。だからね、自分の力で生きてるんと違う。病気の立場であってもね、生かされておるんだ。自分の力で生きてるんじゃない。生かして下さる、そういう一番中心というものが天地にあるんだ。だからその天地を、これをね、神様という。あなたもね、その天地の神様にこれからおすがりさせて頂いて、生かしてもらいなさいや。その神様と共に、天地の一切のものを生かしておい

でになる神様と共に生きる、その生き方をするのが信心という」。この方にそのようにお話しになった。色々と繰り返し繰り返しお話しなさった。

何度となく話を聞かせてもらっておる間にこの方はね、「ああ、そうでございますか。今日からお参りさせて頂きますから、どうぞよろしくお取次頂きますように」と日参（にっさん）が始まった。

助かりたい一心でしょう。つらいんですね。子どもがおる、主人がおる、商売始めて間がない、そういうふうな状態。命に関わる問題です。ですから本気なんですね、助かりたいというものが。ついでに参ってこようかとは違う。

もうそれがね、その手術した体でもってですね、参ってこられる。だんだんだんと参らせて頂いて、お話聞かせて頂いておられるんでしょう。「何とかしてこの人が助かってくれたならば、神様が分かるのになあ。何とかして神様助けて下さい」。先生も一生懸命です。

自分自身の命の瀬戸際に立っておるその中で、この方の口から出たものは、「私はお教会に参らせて頂いて、ずっと教えを先生から聞かせて頂いてますおかげでね、こういうことが分かった。自分という者は、ああ、神様に生かされている自分やなあということ」。

お話というものは、えらい大変なことですね。おなかの中に入ってくる。いつも切羽詰まった状態であるが中に、その教えというエキスが入っていくんですからね、これ。この方の心の中にスーっと入っていく。こうして目が覚めたと

いうことは有り難い。こうしてごはんが頂けるということは有り難い。子どもと話が出来るということは有り難い。制がん剤も飲ませてもらいます。お医者さんのお手当も受けられます。薬もお医者さんも天地のお恵み。全てのこと一切、皆神様の働きだ。お礼申さずにはおられません。これが「神様がして下さっているんだという受け止め方をさせてもらえる」というその喜びですね。

人混みの中で、みんな幸せそうなのに、どうして私だけこんなにつらいことを抱えているんだろうと、孤独な気持ちでいっぱいになったことがあります。けれど、このつらさも、この寂しさも自分の命の元には神様がいて、その神様に今生かされているからこそ、感じることが出来るんだと気付いた時、ほっと心が膨らみました。

どんな時も神様はいつも私たちのそばにいて下さるんですよね。

《信心ライブ》

第三回「ブラボー！　命がつながった」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

今日は、大阪市にある金光教島之内教会の森田弘武さんが、平成十七年にされたお話を聞いて頂きます。

もうこれで自分は死んだと思うような目に遭って助かった時、人は何を感じ、そこからどう生きていくでしょうか。森田さんは、六十七歳の時、まさに九死に一生という体験をされました。

時は平成十四年六月二十三日。信徒集会が、約三百名の参加のもとに玉水教会の記念館で開催されました。

会はプログラム通り順調に進行しましてね。無事に閉会を迎えることが出来ました。で、トイレに行きましたんですけど、めまいがしてきましてね。ふらー、ふらーと。「おかしいなあ」と。「もうこれは少しおかしいなあ。変だなあ」と思いながら、ホールの受付に並んでまして、そこにやっとたどり着きましたらね、腰掛けようとした途端に発作が起こったんですよ。

で、「早く救急車を！」言うて、そこにいた人が手配してくれたら、パッと救急車が来ましてね。病院に到着するや否や、心拍を抑える注射を何回も打ったそうです。そうしても効かん

と。元に一向に戻らないと。で、最後の手段で、電気ショックをしますと。

ベッドの上で全身にベルトを縛られて、麻酔を打たれる。しばらくして、電気ショックをゴン、と。そのショックで、二十センチぐらい、ピュッと体が上がるんですな。胸の上に何か雷がガッと落ちてきたみたいな感じやったですね。

麻酔のせいか、それほど痛みはございませんでした。で、まあそうやって麻酔が効いてきて、集中治療室で寝入ってしもうたわけですね。その後、スーッと眠りました。

で、朝、目を無事に覚まさせてもらったんですが、まあ私、本当にね、朝をこんなすがすがしい素晴らしい朝を、今まであんまり記憶ないんですな。それがですね、パッと目が覚めたら、本当に明るうてね。本当に気持ちのいい目覚めだったんです。

「やったー。命がつながれた。私は生かされた。ブラボー！」言うて、ベッドの上で、こうやってましたんや。その時、自然と左右からね、涙が出てきたんです。

この不整脈。これの病気の原因とかね、そんなんはいまだ完全に分かっていないそうです。で、ＩＣＤと言いましてね。植え込み型除細動器を着装しはったんです。発作起こして失神する前に、これがバッと動いて元へ戻してくれると。今は素晴らしいですな、医学というのは。本当に、日進月歩というんですかね。その機械を入れなさいと。こういう具合に、色々主治医

にご指図されたのも、僕は神様やと思いますから、一切反対しないんです。

その後、面会出来るようになりまして、教会長が見舞いに来てくれました。「世の中の出来事は、全ておかげの中の出来事ですから、しっかりと心に受け止めさせて頂いて下さい」と、こういうみ教えを教会長から頂いたんですね。

その上、信徒集会で関わりを頂いた玉水教会の親先生、日本橋筋教会の教会長先生、田原本教会の先生方が、夜を徹してご祈念して頂いたとお話し下さった。「森田はん、あんた幸せやで。あんたのために夜を徹してやってくれはった」と。そんなん知りませんでしたんです、私。うちの教会長は当然してくれますわな。そやけど、こういうよそのお教会の先生方が夜を徹してやってくれた。僕はお礼参りに行ったけど、こっから先も言わはれしまへんで。「良かった、良かった。森田さん、良かった。森田はん、良かった」ばかりね。

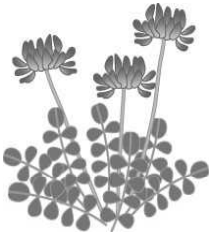
ここの信徒とか、信徒総代なんかとも交流があるもんですから、こういうことを聞かされましてね。「常平生から祈られており、そのお祈りの中で、このように神様のお働きが頂けた。何で九死に一生を森田はんに神様は与えてくれはったんやろうか」。

何で生かしてくれはったんかなあ。神様の思いは、どこにあるんやろう。何をすれば神様に喜んでもらえるんかと。

まず私は、信心の基本姿勢である「参る、聞く、行う」、これを絶対励行したい。一つには

そないに思っています。もう一つには、一日一善でもいいから、人様を助け、人様に喜んでもらう。お役に立たせて頂けたらなあ、と願っております。

森田さんは、教会長の教えを受け止めて、祈られて生きている自分であることを、強く感じました。以来、人のお役に立つこと、喜んでもらえることを、少しでもさせてもらおうと心掛けてこられました。やがて、金光教の教師となり、毎日、人の助かりを神様に祈っています。



《信心ライブ》

第四回「育子さんの宝物」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

今日は、滋賀県・大津教会の山口育子さんが平成二十三年七月、金光教京都西部教会連合会の集いで行った講話をお聞き頂きます。

ちょうど高校三年の時に、父は、父の商売は高級応接セットを売る仕事でね。大丸とか高島屋、阪急さんとかに入れさせて頂いて、商売をさせて頂いておりました。ある時、二千万の不渡りを頂いてね。それを挽回しようと思って色んなことをしたんですが、裏目裏目に出て、結

局は倒産ということになりました。ちょうどそれが、私が高校生でね、これから進路をどうするかというところでした。

父は羽振りのいい人なのでね、商売している時には、面倒見もいい父やったそうです。が、倒産ってなったらね、一応家を売って、社員さんが住んでた横の倉庫の上に私たちは引っ越したんですね。

それまでは、本当にお中元とかお歳暮は、五十くらい業者の方が来て、いつも母が、「何々さん、何々」て書いてたぐらいしていました。でも、もう倒産ってなった時にね、皆さんにご迷惑を掛けるので、母は本当に心を痛めたと思います。当然、今まで来たお中元お歳暮を持ってくる人もいない中、一人、ナカジマさんという人が、母を訪ねて来たんですね。その時に、ちょっとお中元やったかお歳暮やったか忘れたんですけど、持ってきて下さってね、「これどうぞ」言うて。今でも憶えてますが、母は涙しながら、「もう、とんでもないです」って。「皆さんにご迷惑掛けたのに、もうこんなの頂けません」って母がもう涙ながらに言うてる姿を見たんですね。

その時、そのナカジマさんていう人が、「いやいや、そうじゃないです。ここまで育ててもろうたのは、社長さんのおかげなんです」って。「社長さんのおかげでここまでにさせて頂けたんです。だから、倒産した言うてもちゃんと…まあ、何割かだけ返したんやと思うんですが…それも奇麗に清算して頂いたんやから、もう、

そんなに言うてもらわんでもいいです。どうぞこれ受け取って下さい」っていうね、姿を見せて頂いたんですね。

一人そういう方がいた。私はナカジマさんのように、恩を忘れない人になろうって。神様から、そのナカジマさんを通して、何が大事か、お金が大事なのか、健康が大事なのか、この感謝する心が大事なのか、一番何が大事なのかを、ここで学ばせて頂きました。

「倒産したって不幸なことや。そんなもん昔ぜいたくしてるからこうなったんや」という話ではあるんですが、ご信心を頂いていたおかげでね、ほんとに今は、倒産があったから今の私があると感謝しています。

高校三年生という多感な時期に倒産というつらい体験。しかし、育子さんはこのことを通して感謝する心の大切さを学んだと語ります。自分たちがつらい時に、思いを掛けてくれる人があった。それは、たった一人だけれども、どれだけ掛け替えのない一人であったか。どれだけの励みになったか…。誰かがつらい思いをしている時に、今度は自分がそんな一人になりたい。育子さんはそう話すのです。

その後、短大を卒業した育子さんは、夢がかなって幼児教育の道に進み、保育士として働きました。

今、育子さんは仲間たちと一緒に小さな保育園を運営し、子育て支援の活動にも取り組んでいます。そんな仕事柄もあって、小さな子ども

を持つ若いお母さんたちと接する機会が多くあります。時には、こんな相談を持ち掛けられることもあるそうです。

本当に今、倒産が多いのでね。ある家は、本当に大きなおうちが、私立に子どもも行ってたんですね。で、やっぱり倒産した。その時も泣きながら電話してきて、「この子今、私立に入れたけど、辞めるか辞めへんか、この子の一生はどうなるやろか…」って相談受けたんですね。

で、その時も神様にお願いさせて頂いて、「どうぞ、この人が助かるように」って言いながらね、「うちも倒産したんよ。でも、倒産しても暗く生きることも出来れば、それをおかげにして明るく生きることも出来るよ」ってお伝えしました。

そしたら、なんか、「あぁ、すっきりしました」って言って、「そうですよね、私が沈んでては駄目ですよね」っていうことで、それこそ元気になって頂いたり、そういうのがあるたびに、私が倒産したということは、本当に宝やったんやなあって思わせて頂いてます。

「どうか、この人が助かりますように。この人が助かる話が出来ますように」と神様に祈りながら、育子さんは語り掛けます。それは、つらい思いをしている人の心に寄り添いたい、苦しんでいる人の励みになりたいという願いからなのでしょう。

高校三年生の時に体験した倒産という出来

事。育子さんは、そのことをつらかったけれども大切な宝物であったと語ります。その宝物があったからこそ、人の痛みを分かることも出来る、励ますことも出来ると。

育子さんの明るい笑顔は、今もたくさんの周りの人たちに生きる力を送り続けているのです。

「この手のひらのぬくもりは」

金光教今市教会　森山恵美子

昨年の夏、仕事で名古屋に行く機会があった。仕事自体は夕方五時には終わる予定だったが、往復十二時間の日帰りはきつい。そこで、近くに住む兄夫婦の家に泊めてもらうことにした。夕方、マンションに到着すると、義姉がテーブルいっぱいの手料理を用意して待っていてくれた。

しばらくは、互いの近況を報告したり、両親の様子を伝えたりと、たわいのない話が続いたが、夜も深まり、お酒も入ってくると、話題は小さい頃の思い出話へと移った。

「なぁ、あれ覚えてるか？　お前が家出した

話！」と兄。「あぁ～、あったね！」と私。

二人で家出したのに、誰にも気付かれず、いつもの広場にいたところを、「ラーメン伸びるよ～」と母に呼ばれて、あっさり帰宅したこと。ハムステーキをステーキだと思い込み、コンビーフをケチャップで炒めたものをハンバーグだと思っていたこと。母の留守中、父が決まって作ってくれるバターライスをフライパンごと囲み、「かかれ！」の号令で、スプーンで取り合うようにして食べるのが楽しかったこと。兄が初めて一人で散髪屋に行った時、「お利口だったね」と、アイスクリームをくれた店の人に向かって、「うち、三人兄弟なんです」と言って、ちゃんと私と弟の分もアイスをもらって来てくれたことなど。

兄とゆっくり話すのは本当に久しぶりで、私は普段の生活を離れて、ただの妹の顔に戻り、三人でよく食べ、よくしゃべった。

兄がデザートを配りながら、ふと手を止め、「なぁ、お前、母さんがアイスクリーム好きなの、知ってた？」と私に尋ねた。「あぁ…。バニラのアイスクリームでしょ。私もまた実家に住むようになって、母さんが自分のために買い置きしてるのを見て、初めて知った」。「なぁ。実は俺も知らなかった。子どもの頃、俺たちの前で一緒におやつを食べるところ、見たことなかったもんな」。

私たち家族は、小学校低学年まで岡山で過ごし、祖父母が年を取ったので、父の実家である島根に引き上げた。舅（しゅうと）姑（しゅうとめ）との同居に加え

て、低く重たい雲に覆われる山陰の冬に、母はなかなかなじめなかっただろうし、地縁血縁を重んじる独特な土地柄も少なからず負担だったに違いない。また、家族も五人から七人の大家族になり、食事作りにしても、限られた予算の中で、年寄りと子どもの好みそうなものを手を替え品を替え、必死で工夫していたに違いない。

「守られていたんだね…」「うん、本当にそうだね」。

たくさん叱られ、たたかれもしたが、世の中の大抵の親がそうであるように、ピンチの時には、誰よりも味方だった。熱を出せば、夜通しそばに付いていてくれた。苦しくて目を覚ますと、「ん？　起きた？」と、のぞき込む顔があり、胸に手を置いて、とん、とん、とんとたたいてくれた。その手のぬくもりを感じると、ほっとしてまた眠りにつくことが出来た。手を伸ばせば、いつも近くにあったぬくもりを、母はどんな思いで差し出してくれていたのだろう。私たちは、そのことにどれだけ気付けていただろう。

兄は、阪神・淡路大震災の年に結婚した。そのきっかけを、こんなふうに話してくれたことがある。広島にいるいとこの結婚式に出席するため、三日間の休暇を取っていたところ、一月十七日早朝、あの大震災が起きた。交通手段が寸断され、結婚式への出席は諦めざるを得なかったが、兄は単身、神戸へ入り、予定していた休暇の三日間を、避難所でボランティアとして費やした。

そして明日は名古屋へ帰るという日の夕方、凍(い)てつく冬空の下、夕陽のグラウンドを、老夫婦が手をつないで歩く姿を見た。その時、兄は、「ああ、何もかも無くしても、生きている限り、人には出来ることがあるんだ」と思ったという。

何もかも無くして、先が見えない状況でも、そばに手をつなぐ人がいることが、手から伝わるぬくもりが、どれ程力をくれるだろうと。そのぬくもりが、また歩き出す力をくれることがあるかもしれない。家族を持とう。自分も、誰かの支えになり、ぬくもりになりたいと思ったのだと言う。

それから間もなく、「結婚したい人がいる」と、今の奥さんを島根に連れて帰って来た。そして今、目の前にいる二人は、時には親友のように笑い合い、助け合い、長年連れ添った家族の顔をしている。

長い夕食はお開きとなり、義姉が用意してくれた寝床の中で、一人、自分の手を見つめながら思った。この手のひらのぬくもりは、たくさんの人から受け取ってきたもので出来ている。そして、それはこれから出会う人や、ものに、そっと手渡していかねばならない。祖父母から、父や母へ、父や母から私たちへ、いのちを通して伝えてくれてきたように。それは、いのちを頂いた時からもらっている、神様からの課題のような気もする。

とりあえず、明日、駅に着いたら、バニラのアイスクリームを買って帰ろう。そう思いながら、いつの間にか深い眠りに入っていた。

「ココロの散髪いたします」

鹿児島県北部の山あい、県内随一の一級河川・川内川（せんだいがわ）に育まれた豊かな田園風景が広がる、ここ、さつま市に、金光教宮之城教会はあります。この教会にお参りしている伊東星（ほし）さんは昭和二十四年生まれの六十三歳。二つ年上の妻・光子さんと夫婦二人で、鹿児島市郊外に構えた理髪店を切り盛りしています。

「一つ上の姉さん女房は、金（かね）のわらじを履いてでも探せって言いますけどね…」と、伊東さんは、はにかんだように笑いますが、本当に仲の良いおしどり夫婦です。

実は、伊東さんは、左足に障害があります。二歳の時に患った病気の後遺症で、まひがあるのです。今でも杖が必要です。

子どものころ、おばあさんが、「金光様、金光様」と祈りを込めながら、その左足をさすりさすりしてくれました。そして、「天地の親神様が授けて下さった体だから、神様にお願いすれば、きっと良くしてもらえるからね」。そんなふうにいつも話してくれたことをよく覚えています。

伊東さんは、振り返って思います。こうやって思いをかけてくれた祖父母や両親、みんなの祈りの中で、自分はここまで生きてきたのだな、そのおかげで、今でも元気にこうして働くことが出来ているのだな、と。

さて、話はさかのぼり、理容師の専門学校を

卒業した伊東さん。教会の先生に相談して、ある理髪店に修行に入ります。五年間の寮生活でした。きっちり技術を仕込まれる、その反面、ものにならなければ早く辞めた方が本人のため、という厳しい環境でした。

一日中の立ち仕事は体にこたえます。同僚の中には、あまりにつらくて、トイレに逃げ込み、足がパンパンで座ることも出来ず、立ったまま泣いている、そんな人もありました。足に障害のある伊東さんにとっては、なおさらです。

先輩・後輩の上下関係や人間関係に悩むこともありました。そんな時、伊東さんは時間を作っては教会にお参りし、先生につらいこと苦しいこと、思いの丈を聞いてもらいました。

教会の先生は、いつも、「星くん、よく参ってきたね」と、伊東さんの顔を見ては喜んで下さいました。そして、伊東さんの話をじっくり聞き、励まし、力付けてくれました。伊東さんは、「それだけで心が助かり、また頑張ろうという気持ちになれました」と振り返ります。

つらいことがあって、話を聞いてもらいたくてお参りをした伊東さんを教会の先生は、喜んで迎えてくれました。伊東さんも、だんだん、先生の喜ぶ顔が見たくて、お参りをするようになっていきました。

そんなある時、先生が、「神様に喜んで頂ける、そんな人にならせて頂きなさいね」と言われました。今でも伊東さんは、先生のその言葉をはっきりと覚えています。その言葉は、伊東さんの心に深く刻み込まれました。

やがて五年間の修行を終え、いったん遠方で就職した伊東さんは昭和四十八年、独立して郷里の鹿児島に理髪店を構えました。そして、縁あって奥さんと出会い、それからは夫婦二人三脚です。

結婚してすぐの、真冬の寒い時期でした。南国九州、鹿児島といっても山あいには雪も積もります。そんな中、宮之城にある教会まで、片道三十七キロの山道を、大きなバイクに二人でまたがって参拝したことは、今でも夫婦の語りぐさです。

お客さんもほとんど無かった新規開店の頃、どんどん忙しくなって目の回るような毎日が続いた頃、そしてだんだん地域の高齢化が進んできた最近…。良い時、そうでない時の波はあります。でも、自分のことを、常にかばいながら支えてくれる奥さんと二人一緒だから、四十年間ここまでやってくることが出来たのだと、伊東さんは思うのです。

伊東さんは、今、障害を持った人たちの施設でボランティアをしています。施設を訪問して、入所している人たちの散髪をするのです。休みの日に夫婦で通うようになり、かれこれもう二十年以上になります。

伸びた髪の毛をカットして、セットして、さっぱり奇麗になってもらうと、皆さん、表情がぱっと明るくなります。笑顔になります。

伊東さん自身、これまでもどかしい思いや、つらい経験も重ねてきましたから、体の不自由

な人たちの気持ちはよく分かります。そんな自分が、人のために何かお役に立てることをと思った時に、自分の持っている理容師の技術を生かすことを思い立ったのです。

伊東さんは、「よく人のため、人のためと言うけれども、結局は全部自分に返ってくるんですよね」と、こんなふうに話します。

障害を持った人のために、その人たちに喜んでもらおうと思って始めたこと。でも、喜んで下さった人たちの笑顔に触れると、こちらもまたうれしくなる。だから、また次も行こうと思える。そして、二十年も続いている。この理容ボランティアは、伊東さん自身にとっても、大きな喜びとなっているのです。

人に喜んでもらい、そのことで自分自身がうれしくなる。その時、神様も喜んで下さっているのかもしれません。あの時、教会の先生に言われた「神様に喜んで頂けるように」という言葉は、ずっと伊東さんの心の中に響き続けています。

伊東さんは「六十歳も過ぎて、サラリーマンで言えばもうとっくに定年ですけどね…」と言いながら、それでもみんなの笑顔が見たくて、奥さんと二人、今日もお客さんを迎えます。

「母が残してくれたもの」

「今、私たち夫婦が安心して毎日を送っていられるのは、全部お母さんのおかげなんです」

そう語るのは、茨城県にお住まいの、今年八十二歳になる柏（かしわ）つや子さんです。

今、自宅でがんの治療を続けているご主人と共に、感謝の毎日を送っているつや子さんに、神様との出会いから今を語って頂きました。

今から八年前、夫は前立腺がん、悪性リンパ腫、胃がんが一度に見つかり、八カ月間入院しました。おかげで治療は順調で、今はわずかな飲み薬で自宅療養をしています。背中と肺に、まだ影が残っていますが、それでも、私も主人も、不思議なくらい何も心配はしていません。母がいつも言っていた、「悪いことを言って待つな、先を楽しみにしなさい」という金光教の教祖の教えが、私たちの生きる指針になっているのです。

私が金光教全隈（またくま）教会の名前を初めて聞いたのは、長男を妊娠した時でした。妊娠を知った母があまりにも喜ぶので訳を聞くと、結婚して二年間、子どもが出来ない私のために、知人に勧められて、毎日四、五キロもの距離を歩いて教会にお参りしていたというのです。

長男の生まれた昭和三十四年当時、私は小学校の教師をしていました。今のようにちゃんとした産休制度などなかった時代です。お産で休むと、校長先生か教頭先生が代わって学級を受

け持たねばなりませんから、お産は嫌がられます。ですから、その時の私は、妊娠が分かった時はうれしさの半面、少し複雑な思いでした。

「だから女の先生は要らないんだ」、そう言われたくなかったのです。

そんな私の心情を察してか、長男が生まれてからすぐ、離れで暮らしていた私の母が息子を引き取って、ずっと母親代わりをしてくれました。ですから私は、自分の子どものおしめを替えたこともなければお乳を与えたこともありませんでした。

息子が四歳の頃になって、私が仕事を終えて帰宅すると家(うち)にやってくるのですが、家の中をキョロキョロ見るだけで帰っていってしまうのです。そんな時には、「やはり子どもは手元に置かなければ」という気になるのですが、すぐに忙しさにかまけて、母に任せてしまっていました。

長男が通っていた幼稚園の先生は、息子には母親がいないと思っていたらしく、卒園式で初めて幼稚園に行った時、「お母さん、いらしたんですね」と言われたのです。その時は、さすがに恥ずかしさでいっぱいになりました。

母は孫のこと以来、ずっと熱心に教会へお参りを続け、教えを頂きながら私たちのことを願い続けてくれていました。私は時々日曜日にお参りするくらいでした。

私が本気で神様に向かうようになったのは、更年期障害がきっかけでした。食事ものどを通らないような状態が長く続き、何とか神様に治

して頂こうと必死になってお参りを続けました。その頃から、教会は私が一方的にお願いをするだけの場所ではなく、先生に話を聞いて頂ける場所、そして生き方の指針である教えを頂く場所になっていました。

教員生活の三十四年間が終わり、無事に退職し、ふと気が付くと、息子は信じられないほど、本当に素直で心の優しい子に育ってくれていました。私は、教え子である他人の子どもにばかり一生懸命向き合ってきたのに、ありがたいことに私の子は、神様が母の手を通して、立派にお育て下さっていたのです。

ある時、私は息子に、「何もしてやれなくてごめんね」と謝ったことがありました。でもその時息子は、「お母さんは仕事があったのだから仕方がないよ」と笑顔で答えてくれました。

母は孫の成長を見届け、「みんな仲良く、神様を忘れぬように」とだけ言い残し、お世話になった周りの人たちにお礼を言いながら、八十六歳で安らかに他界しました。

私も年をとって、息子の子ども、私には孫娘ですが、その子のお世話をするようになってからというもの、遅まきながら、だんだんと母への感謝の気持ちが大きくなってきました。

息子が曲がることもなく素直に育ったのは、「どうか幸せになってほしい」という、母の愛情のおかげの他なかったと、今さらながら心からそう思います。でも、考えてみると、私はそれを母にちゃんとお礼が出来ていなかったのです。

お礼が出来ていなかったことについては、それは神様に対しても、全く同じでした。長年信心をしてきたといっても、ただ神様に願うだけの信心だったように思うのです。困った時、いつも母や神様に助けて頂いてきたのに、どちらに対しても本当にお礼が言えてなかったと思うのです。

私が今、こんなに安心して暮らしていけるのは、全て母のおかげ、母が残してくれた信心のお徳のおかげです。すがることの出来る場所を与えてくれたのも、全て母のおかげなのです。

そのことを改めて思い直し、残された人生、今からでも、今度は母や神様へのお礼を土台にした、そんな生き方が出来るよう、稽古をさせて頂きたいと思っているのです。

「今あるいのちを振り返って」

鹿児島県北部、熊本県に程近い、伊佐市大口に生まれ、今年、七十三歳を迎えた入木田覺（いりきださとる）さん。三十八歳の時から、そろばん教室を続けています。毎朝、奥さんと夫婦そろって大口教会に参拝し、命を頂いていること、健康であることを神様に感謝して、一日の生活が始まります。

そろばん教室を始める前は、郵便局に勤務していました。二十四歳で採用され、翌年には結婚して穏やかな日々を過ごしていましたが、十年後の三十五歳の時、肝臓の病気を患いました。今で言うC型肝炎です。病状が進むうち、診断した医師から、「肝硬変に近い状態になっている」と言われました。さらに、「命の保証は出来ない」とまで言われ、郵便局の仕事は辞めて、無理のない他の仕事に就くことを勧められました。その医師の言葉通り、郵便局を退職して、そろばん教室を始めたのでした。

入木田さんが金光教と出合うのは、命と向き合うことになった肝臓病を患ったことがきっかけでした。

病気が分かってからも、体調が悪いのを押して仕事を続けていましたが、やがて入退院を繰り返すようになりました。名古屋にお住まいの奥さんのご両親は、そんな入木田さんが心配で仕方ありませんでした。ついには仕事を辞めて鹿児島へ渡り、同居して入木田さん夫婦を支えてくれました。

奥さんのお義母さんは、熱心に金光教の信心

をされていた方でした。お義母さんは毎日、朝、昼、夕、一日三回、大口教会にお参りして、入木田さんの回復を懸命に祈ってくれました。そんなお義母さんの姿に毎日触れるうち、「このままではいけない。私のために、必死に祈ってくれているのに…」と、入木田さんは心を動かされ、「教会へお参りしよう」という思いが湧き起こったのです。

お義母さんの後を追いかけるようにして、初めて教会に参拝したのは、昭和五十二年十一月一日のことでした。外は一面に霜が降りて、とても冷え込んだ朝でした。三十七歳の時でした。

教会の先生から、「今は八方塞がりの状態ですね。神様にすがって、乗り越えさせてもらいましょう」と言葉を掛けられ、お義母さんと毎朝の教会参拝が始まりました。

お義母さんは、参拝の行き帰りに、信心の仕方や作法などを、丁寧に教えてくれました。

参拝を重ねるうち、だんだんと体調も落ち着き、新しく始めたそろばん教室の仕事も、療養しながら、毎日無理なく出来ました。

五十二歳の頃、インターフェロンによる治療を医師から勧められました。ところが、教会の先生からは、「今は時機が良くない」と言われました。毎日参拝を続け、教会の先生と相談しながら、治療開始の時機をうかがっていました。

そしてようやく六十一歳の時、インターフェロン治療を始めました。大変効果がありました。費用の面でも、もし医師から勧められるまま、すぐに治療を始めていたら、一本三万円もの治

療費がかかっていました。タイミング良く、保険が適用されるようになり、一本一万円という三分の一の費用で、治療を受けることが出来たのでした。

半年間で八十三本の注射治療を受け、翌年ついに、「C型肝炎は完治した」と、医師から告げられました。三十年間にわたる病との生活でした。そして、C型肝炎が完治してから、今年はちょうど十年の節目の年になります。

病気の経験は、肝臓病だけではありませんでした。十代後半に、脊椎(せきつい)の結核と言われる脊椎カリエスにかかったこともあります。回復するまで二年間、病院で寝たきりの生活を送りました。その後、二十歳の時、経理学校に入学して、簿記やそろばんなどを習いました。この時習得したそろばんの技能を生かして、そろばん教室を思い立つのでした。

金光教には、次のような教えがあります。

「神様は、人間を救い助けてやろうと思っておられ、このほかには何もないのであるから、人の身の上にけっして無駄事はなされない。信心しているがよい。みな末のおかげになる」

入木田さんは、金光教と出合う以前から、すでに神様は道筋を付け、歩む道を準備して、助かりへ導いて下さり、今につながっているように思えてなりませんでした。

そして今、入木田さんは、「病気の中からギリギリのところで神様に助けて頂いた命である」ということ、「助けられて今がある」ということを心に留(と)めて、毎日神様に感謝していま

す。さらに、神様から頂いたこの命と健康を、どのように使わせて頂くかということを課題にしながら、命の恩返しをしていきたいと思っています。

課題に取り組む一つとして、鹿児島刑務所で受刑者の方々にそろばん指導をしています。

「そろばんを通じて、忍耐力や我慢強さといったものを養ってもらいたいんです」と、お役に立てる喜びをかみ締めながら、意気揚々と語られます。

また、次のような目標を掲げ、実践に努めています。

「人の悪口を言わない」

「人を責めない」

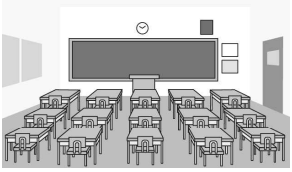
「腹を立てない」

「不平不足を言わない」

「人の助かりを祈る」

「地域のボランティア活動を推進する」

中でも、「腹を立てない」という実践に苦心されている様子で、「家内に小言を言われると、つい言い返してしまうんです」と、はにかみながら、おどけるように話します。そんな入木田さんからは、夫婦仲むつまじく、毎日を大切に過ごされている様子がうかがえるのでした。



「神様はどう思っているんだろう」

「結婚前に彼から、『会ってほしい先生がいる』と言われ、教会の先生に会ったのが、私と金光教の出合いでした」と、おっとりと、でも芯のある口調でお話し下さったのは、鹿嶋市にお住まいの加藤佳枝さん、四十六歳です。

約束の日、時間に遅れてしまった佳枝さんを、教会の先生は、「女性は身だしなみに時間が掛かるものだ」とおおらかに迎えてくれました。「宗教」と少し身構えていた佳枝さんでしたが、その出会いから親しみも増し、結婚後も教会に参るようになっていました。

四年前の年の暮れのことです。佳枝さんは、冬休みを前に浮かれて庭で遊んでいる三人の息子たちに、「ケガをしないように」と注意していました。しかしその矢先、八歳の次男が一メートルほどのフェンスによじ登り、落ちてしまいました。病院では鎖骨骨折と診断されました。

ところが、三日後、次男の首が曲がったままの状態で動かず、痛がり、吐いてしまいました。微熱もあり頭痛もするようです。初めは風邪との診断でしたが、その後も症状は変わらず、改めてＣＴも撮りましたが、首の骨もずれていないとのことでした。しかし、年が明けても首の痛みは増すばかりで、寝起きするのも自分では出来ず、当然学校にも行けません。

教会の先生にこれまでも何でも話し、力付けられてきた佳枝さんは、次男のこともお話しし ました。先生は、「このいたいけな子どもの心

底からの願いを、神様は必ず聞いて下さいますよ」と言って、熱心に神様にお願いして下さいました。原因が分からず不安な気持ちが、先生の優しい言葉で少し楽になりました。先生は、お神酒を少し手に取って、痛いところに付けるよう言われました。

教会の先生のことは信頼していますが、お神酒を付けることに違和感がありました。ただ痛がっている我が子を前に何とかしなければという焦りばかりが募っていきました。

一月末、効果は期待出来ないと言われましたが、けん引治療のため、次男を入院させました。佳枝さんは毎日次男を見舞い、夜、家に帰ると不安に襲われました。

「本当にこの治療でいいのだろうか？　あの子を助けられるのは母親の私しかいない」。佳枝さんはパソコンに向かい、インターネットで病名、治療が可能な病院、ありとあらゆることを調べまくりました。調べれば調べるほど分からなくなり、眠れなくなりました。昼間一人で車を運転していると涙が出て、自分で自分を追い詰めていきました。

三月に入っても全く回復がみられず、医師から、「危険を伴い、未経験ではあるが手術も考えてみよう」と言われます。佳枝さんは、今掛かっている医師が信頼出来なくなり、インターネットで調べた大きな病院で診察出来るよう手配しました。とにかくその時は必死でした。

しかし、せっかく掛かったその病院のお医者さんからは、「治りません。気を付けて暮らし

ていくか、死ぬ覚悟で難しい手術をするかのどちらかです」と言われたのです。さらに、「死んでいたかもしれない。でも今ちゃんと命があって生きている。それだけでもすごいことでしょう」と言われました。佳枝さんが最も恐れていた最悪の結末を宣告されました。

打ちのめされ、佳枝さんは教会の先生に電話で報告しました。すると、「あなたは、信心の道に外れていますよ」と一喝されました。なぜ教会の先生に叱られるのか、分かりませんでした。「子どものためにやっていることのどこが信心の道に外れているのだろう」。そういう気持ちでした。

続けて教会の先生は、「お医者さんの言われた言葉は、神様の言葉じゃないですか。まずは今、命がある。生きている。死ぬこともあったかもしれないその命を助けようと、今まであなたが頼りなく思っているお医者さんたちが最善の治療をして下さった。そのことに感謝していますか」とおっしゃいました。

佳枝さんは、今日までのことを振り返ってみました。とにかく良くならないことにとらわれて、手遅れにならないかと右往左往していた自分でした。

その時ふと、佳枝さんは、「神様は私のこと、どう思っているんだろう」という思いになったのです。「あきれているだろうか。神様はずっと助けて下さろうとしていたんですね。そして、次男の命をつないで下さり今がある。このことがどれだけ尊いことだったのか」。

神様の温かい思いがあふれ出し、その思いを頂くこともせずにいた自分に気が付きました。「神様、ごめんなさい。こんな私ですが、まだ助けてくれますか？」。涙があふれて止まりませんでした。そして、どうしたらその思いを頂くことになるのか考えました。

佳枝さんは目の前にあるお神酒を思わず手に取って、神様の思い、祈って下さっている先生の思いとして、次男の首に付けました。そして今掛かっているお医者さんの治療を、「神様のお手当て」として受けていこうと思いました。

けがをしてから半年後、病院に行くと、「九十八パーセント治っている。運動をやってもいいし、もう診察に来なくていいよ」と言われました。ここまで長い長い道のりでした。原因は珍しいケースで、けがと同時に風邪を引き、のどの腫れが脊椎（せきつい）に移行してしまったのではないか、とのことでした。

出口が見つからず、一方的に不安な感情を神様にぶつけてきた佳枝さんでしたが、「神様の方から自分をご覧になったら」と考え、神様の思いを受けていきたいと思った時、何かが変わっていきました。

「一方通行ではない、神様の存在を近くに感じた貴重な経験でした」と爽やかに語ってくれました。

「笑顔で」

普段、何気ない日常生活を送っていて、「突然、どうしてこんなことが起きてくるのだろう」と感じるような時はないでしょうか…。予想もしないことに出合った時、人は戸惑い、現実を受け入れられないこともあります。

秋田県大曲教会に参拝する、四十七歳の山藤順子さんは素朴で親しみやすい人です。ご自分が体験された出来事を次のように話してくれました。

私には子どもが二人いまして、養護学校に通う中学一年生の女の子と、小学校六年生の男の子です。初めての出産の時のことです。結婚して七年目にやっと妊娠し、経過は順調でした。

ところが予定日の一週間前に、お腹が痛くなり破水し、突発性の早期胎盤剥離（はくり）によって、大出血を起こしました。意識がなくなり生死をさまよったんです…。お医者さんには、母子共に命が危ないと言われましたが、金光教の信心をする母と、教会の先生の懸命なお祈りもあって、十時間後に奇跡的に意識が回復し、子どもの命も助かりました。

幸い、入った時が朝の時間帯でしたので、婦人科も小児科も、お医者さんが揃っていて、手を尽くして下さいました。後で聞いたのですが、私を助けようと、患者さん方が並んで、一六〇〇ccの輸血をして下さったんだそうです。

歩けるようになり二日目、初めて赤ちゃんと

対面しました。管をたくさん付けられて保育器に入っていましたが、自分が出産したという感覚が全くなかったので、「この子ですよ」と言われても、「え？　そうなの？」という不思議な気持ちでした…。お医者さんには、「反射的なものは備わっていますが、体の発達が遅れています。経過をみましょう」と言われました。

その後、地元の療育センターを紹介され、そこで初めて、娘・有貴の病名が分かり、脳性マヒと告げられました。あまりのショックに思わず出た言葉が、「治りますか？」でした。しかし、お医者さんの「治りません…、でも訓練によって変わってきます」という言葉にぼうぜんとし、頭が真っ白になりました…。

療育センターから、「三週間後に部屋が空きますので、まず、一カ月半、お子さんと一緒に入院をして下さい」と言われました。でも、私は、「そんなことして何になるんだろう？　家なら主人に手伝ってもらえるのに…」と、あまり気持ちが進みませんでした。

入院までの三週間、毎日何を考えて、どう過ごしていたのか全然覚えていないんです…。とにかく、真っ白でした。そんな状態での入院となりましたが、実はそこでの経験が、私の気持ちを変えるきっかけとなりました。

私がまずビックリしたのは、お母さん方がみんな、とっても明るいんです！　有貴より重症の子どもさんを持つお母さんも居るのに、みんな笑ってるんです!!　お医者さんも看護師さんも…。私一人が暗い顔してて、「何でこうなん

だろう」と思いました。これまで、「なぜ？なぜ？」と責めることしか出来なかったんですが、私だけじゃなかったんだと気付きました。目の前に光が差すのを感じました。「下を向いていても何にも変わらない。前を向こう。そうしていたら、みんな声を掛けてくれる」そんなふうに思いました。

私は、金光教の信心をする母の背中を見て育ちました。母から、「学校や仕事に行く前、必ず、神棚に手を合わせてから行きなさいね。守って頂けるから」と教えられました。それをするのが私の日課であり、一日の始まりでした。

お嫁に行くと少し意識は薄れましたが、母はずっと教会にお参りして、私たち家族のことを祈ってくれていました。私も、子どもを授かって初めて、親の思いというのが分かりました。今では毎週、大曲教会に子どもを連れてお参りさせてもらってます。有貴は、教会の先生の顔を見ると、ニコニコ笑うんです。

教会では、自分の胸のうちを何でも聞いて頂いています。先生のお話で気付かされることもありまして、スッキリした気持ちで帰れるんです。

でも、二人目の大貴を身ごもった時は、ずいぶん葛藤しました。ちゃんと生まれてきてくれるのかな…。もし出産の時、子どもを残して、私が先に逝ってしまったらどうしよう…。二人も育てていけるのかな？　心配する気持ちを正直に教会の先生に伝えました。すがるような思いでした。

先生は、「大丈夫。お祈りしていますからね。有貴ちゃんには姉弟が必要です」と言って下さいました。先輩のお母さんには、「うちでは下の子どもが助けてくれるよ」と励まして頂きました。

みんなの思いが込められて、大貴が生まれました。初めて自分の耳で、赤ちゃんの産声を聞きました。骨盤が狭く、帝王切開でしたが、陣痛も実感出来ました。主人は大貴が生まれてから、いっそう協力してくれるようになりました。

大貴が、「ただいまー」と学校から帰ると、有貴がうれしそうに声を出して笑うんです。弟のことが大好きみたいです。大貴は家に、友達もよく連れて来るんですが、「お姉ちゃんは養護学校に行ってて、車椅子に乗っているんだよ」とオープンに話しています。大貴の存在は、有貴にとって刺激になっています。有貴の可能性を摘んでしまわないよう、毎日のリハビリも頑張っています。今までで一番うれしかったことは、ストローで飲めた時かな…。

順子さんはしみじみと、「神様って目には見えませんが、いらっしゃるんだなーと思います。神様のお力で生かされて、私たち親子は成長させて頂いているように思います」と飾らない笑顔で話されます。たくさんの人に支えられながら、前向きに生きる順子さんでした。

「いつでもどこでも神様といっしょ」

児玉ミエさんは現在八十歳。青森県と岩手県との県境に近い、秋田県北東部にある山あいの村で年を重ね、夫を亡くしてから、息子夫婦と三人で暮らしています。折々に五キロほど離れた金光教花輪教会に参拝し、畑で、シソの葉を栽培するなど、今も元気に過ごしています。

全く信心に縁のなかったミエさんが、どのようにして神様と出合い、神様と共にどんな生活をされているのか、紹介しましょう。

ミエさんが二十一歳で隣の農家に嫁いだ頃、村の大半が、農業の傍ら炭焼きをしていました。ミエさんも重い荷物を背負い、夫と二人で炭焼き小屋まで一時間ほど歩き、炭焼きを手伝いました。とりわけ、雪深い真冬の炭焼きはきついものでしたが、苦に思ったことはありません。訳もなく怒り出す舅（しゅうと）との生活を思えば、口数は少ないけれど優しい夫と、二人だけで仕事に打ち込めるのは心安まる一時でした。

しかし、二人の子どもを授かり、下の子がよちよち歩きをし始めた頃、思いもかけない事態が起きました。それまで元気だった夫が突然、「だるい。体が痛い」と言い出し、まったく働けなくなってしまったのです。

あちこちの病院で診てもらいましたが、その原因が分からず、夫の具合は良くなりませんでした。でも、炭焼きをやめるわけにはいきません。夫には弁当だけを持ってもらって炭焼き小

屋に行き、ミエさんがほとんど一人で動いて炭焼きをしました。

そんな状態が四年くらい続き、夫は、本家のおばあさんの勧めで、家から五キロくらい離れた花輪教会にお参りをするようになりました。

教会の先生は、「お医者さんの言うことをよく聞いて、真面目に信心をさせてもらえば、船にも車にも積めないほどのおかげが頂ける」と言われました。そして、一年ほどお参りをするうちに、体の痛みが取れ、だるさもなくなってきたのです。夫は、「先生の言う通りに信心をさせてもらい、俺みたいな人間にでも神様はおかげを下さった。信心してよかった」と、よくミエさんに話してくれたそうです。

やがて夫は、以前のように元気になり、農業の忙しくない時は神奈川県の建設会社に働きに行きました。その間、ミエさんが夫の代わりに教会にお参りするのです。夫は仕事先でも、近くの教会に参拝しました。そんな中で自宅を新築し、土地を増やすことが出来たのを、「教会にお参りさせて頂いたおかげ」と二人で喜び合いました。

夫が仕事に行っている間、ミエさんは炭焼きの他、色々な農作業を女手一つでしなければなりません。でも、時間をやりくりして、教会にお参りし、色々な行事や活動にも参加するようになりました。

一月には毎日、信心仲間と連れだって、朝四時に家を出て教会まで、一時間余り雪の中を歩き、朝のお祈りに参拝しました。お祈りの後、

先生から教えを聞いたり、道中、信心仲間から信心話を聞かせてもらうのが楽しみだったのです。中でも、「決して神様を手放してはいけないよ」というお話が心に残りました。「いつでも、どこでも、神様は私と一緒」。そんな思いが次第にミエさんの心に根付いていきました。

ミエさんは友達の誘いで、六十三歳の時、神奈川県にミカンもぎの仕事に行きました。行きはみんなと一緒でしたが、帰りは一人です。ミエさんは地元を離れることがあまりないため、すごく心配でした。たまたま、住み込み先の食事場所に神棚があったので、朝食時、いつも神棚に向かって、「今日一日、何事もなく、元気に働かせて下さい。うちに帰る時には、無事に帰ることが出来ますように…」と、心の中で真剣にお願いし、夕食時には一日のお礼を申し上げていました。

すると何日かして、そこの奥さんに、「児玉さん。何か信心しているの？」と聞かれ、金光教を信心していることや、毎日、神様にお願いやお礼をしていることを話しました。また、「金光教の神様はどんな神様なの？」と聞かれ、「天地金乃神様は天地の親神様で、天は父、地は母と言われ、作物を育て、人間を元気に働かせて下さる神様です。それで毎日、神様にお礼を申し上げているんです」と答えました。

すると、横で会話を聞いていたご主人が、「なるほど児玉さんの言う通りだ。自分たちは、ミカンが高く売れればいいとか、たくさん採れればいいとかばかり考えていたけれど、天地の親

神様にお礼をする心には気が付かなかった。良いことを教えてもらった」と喜んでくれたのでした。

このことがあってから、ご主人の考えで、夕食の時にみんなで、「今日も元気に天地の間で働かせて頂き、ありがとうございました」と、声に出して感謝し合ってから、晩ご飯を食べるようになりました。また、ご主人が、「生産組合の会合で、あなたから教えてもらった、『感謝しながら働くことの大切さ』について話してきたよ」と言ってくれました。

さらにありがたいことに、一カ月ほどの仕事が終わった時、一人でも帰れるように、ご主人が上野駅まで送って下さったのでした。

数年前、十年ぶりにその農家から、「児玉さん、どうしてる。元気か？」と電話がありました。

「私のことをまだ忘れないでいてくれるのがうれしかった。山のてっぺんで働くのも、木に登ってミカンを採るのも、本当に楽しかったなあ」と、懐かしげに話すミエさん。

畑では、「このくらい伸びたのか。お天道様はありがたいなあ」「シソの葉っぱさん、夕べ寒かったでしょう。ありがとうございます。今日も一日頑張ってくれよなあ」と作物に声を掛けるなど、日々、天地の恩恵の中に生かされている喜びを実感し、天地の親神様に感謝する生活を進めています。

「あの言葉がなかったら」

京都三条通に和紙工芸品の卸問屋、「長谷川松寿堂」があります。

ショールームには、和紙で作った色とりどりのびょうぶや扇子、便箋、中にはモダンなデザインの小物入れなど、どれも手に取ってみたくなるものばかりです。案内して下さったのは、その松寿堂の二代目の奥様、長谷川敏子さん。現在は敏子さんのご長男が社長となって、さらに展開している老舗です。

敏子さんは今年八十九歳、美しい京都弁が似合うステキなおばあちゃんです。「昔は色紙と短冊しかあらしまへんでしたんえ」と、敏子さんは昔を懐かしむように言葉をつなぎます。「こ

んなええ場所に、店が出来ましたのは先代のおかげどす。先代は丁稚(でっち)から、えらい苦労しはった方どした」。

長谷川松寿堂の初代、長谷川忠三さんは敏子さんのお舅(しゅうと)さんに当たりますが、熱心に金光教の信心をしておられました。

そのご縁で、敏子さん夫婦は金光教加茂川教会で結婚式を挙げました。その時が敏子さんと金光教の初めての出合いでした。

お父さんは朝参りを、お母さんは夕方にお参りと、熱心に信心をしていた家族でしたが、敏子さんに信心を強制することはありませんでした。

でも、ある日のこと。お父さんは京都四條南座(みなみざ)の芝居の券を敏子さんに下さいました。南座は教会の近くにあるので、「敏子、芝居を観ておいで。その帰りにちょっと教会に参っておいで」と言われました。

久しぶりの芝居を楽しみ、教会に行って先生にあいさつをして帰ってくるとお父さんは、「よぉ、よぉ参ってきたなぁ」と、何度も褒めて下さるのです。こんなに喜んでもらえるのなら、自分からお参りしてきたら、どんなに喜んでもらえるだろうかと、敏子さんは知らないうちに自分からお参りするようになっていきました。

敏子さんのご主人は八人兄弟の長男。しかも戦争でご主人を亡くしたお姉さんが、子ども二人を連れて戻ってきており、大家族の大変さがありました。それでもお母さんは、「敏子も遠慮せんと、たくさん子どもを産みや」と言って

下さり、自らねんねこを着て、敏子さんの四人の子どもたちの世話をして下さいました。

一代で大変な苦労をして立派な店を構え、財産をこしらえたのに、ちっとも偉ぶらずに世話をしてくれるお母さんに触れながら、信心のある家に嫁いできて良かったと敏子さんは思ったのでした。

また、お父さんは、「人間というものはお互いに助けおうて生きるんやで。助けといたら、必ず助けてくれる時があるからな」と、敏子さんのそばにそっと来ては、ぽつぽつと何気なくおっしゃるのでした。そんなふうに語りかけてくれるお父さんの言葉が、敏子さんは大好きでした。

ところが、子どもたちが大きくなって、兄弟たちも結婚して外に出た頃、お母さんが脳卒中で倒れました。

金光教の教会には、ただお祈りをする場だけでなく、「お結界（けっかい）」と言って、先生に願い事や困った事などを聞いて頂く場があります。そこへ敏子さんは行って、「お母さんはいつも脳卒中にはなりたくない、と言うてはりましたのに、脳卒中で倒れてしまわれました」と夢中で先生にお話ししました。

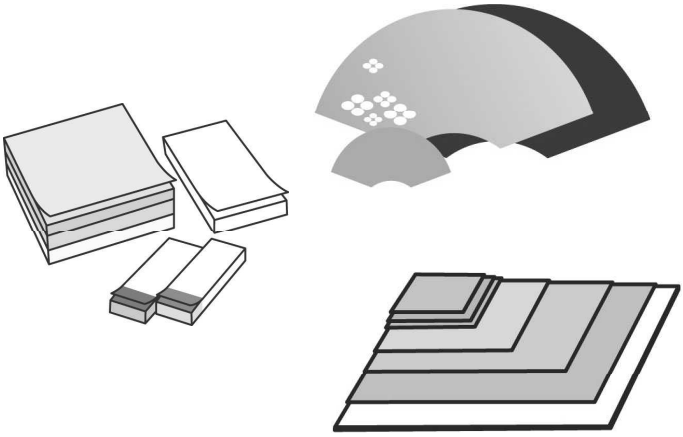
すると先生は、「あんたのお母さんは偉い人なんやで。それはあんたに徳を積ませるためなんや。そのためにお母さんは体を傷めてくれはったんやと思うて、大事にお世話をするんやで」とおっしゃったのです。徳を積むということの意味は分かりませんでしたが、その言葉を敏子

さんはしっかりと心に刻み込みました。
幸い、家にはお姉さんがいてくれたので、二人でお世話をすることが出来ました。お父さんがいつも、「人を助けといたら、必ず助けてくれる時がある」と言われたのは、このことだったと思いました。それから、お姉さんと助け合って、一生懸命にお母さんのお世話をいたしました。
そして六年半の介護の後、お母さんは亡くなりました。その時も敏子さんはすぐに教会に参拝しましたが、その時、先生は、「あんたな、お母さんはつい立てやったんやで。あんたと兄弟たちとの間に立って、あんたを守ってくれてはったんや。そのつい立てが無くなって、これからはあんたが顔を出すんやで。お母さんのお世話をしていた時と同じようにしておりや。私がしてきたということが一切ないように」ときつい口調で言われました。
慰めの言葉でも、ねぎらいの言葉でもなく、「分かったか。お母さんはつい立てやったんやで」という意外な言葉は、そのきつい口調のせいもあって、その時の敏子さんには厳しく響きました。
敏子さんは思わず涙がこぼれ、家に帰ってしまおうかと思いました。ところがその時、厳しい顔付きの先生の目にも涙が光っていたのです。その涙を見て、敏子さんは先生の深い思いを悟りました。
お母さんが病気になった時も、亡くなった時も、先生は大家族の長谷川の家での敏子さんの

立場を心配して下さっていたのでした。

何十年経った今も、改めて敏子さんは思います。

「あんたに徳を積ませるためやで。そう思うて大事にお世話をするんやで」「お母さんはつい立てやったんやで」という、先生の言葉がなかったら、私はこの家で辛抱が出来ただろうかと。そして、こうして先代からの精神そのままに息子が商売を継いでくれ、家族に大切にされている自分を思う時、これは自分の力で出来たのではない、これこそが「徳」というものであろうと、先生の祈りの深さを思うのです。



「琵琶湖の湖畔から」

滋賀県琵琶湖のほとりにある、喫茶店・ドリームを経営する鈴木直良（なおよし）さんは六十五歳。

黒い屋根のお店は、天井が高く落ち着いた広い空間。大きなガラス窓から、太陽の光がふんだんに店内に注がれています。

お店の中心には、神棚が祭られています。取材の日は、ゆったりとしたカウンターテーブルで常連のお客さんたちが、おいしいハンバーグランチに舌鼓を打っていました。

昭和二十一年、近江八幡市の貧しい農家に四人兄姉の末っ子として生まれた直良さん。お母さんはリウマチで関節の痛みが激しく、松葉杖をつきながらの生活。家でも這（は）うようにして神棚の前に行き、祈りを捧げていましたが、「手足が痛い痛い」と言いながらも、金光教北里教会への参拝は欠かしませんでした。直良さんは、子ども心にお母さんが心配で、船に乗って日野川を渡り、五キロ離れた教会にお参りする母の手助けをしました。

昔から農業の盛んなこの地域は、どこの家にも田舟という小さな舟があり、それを利用してのお参りです。歩くことも困難で、竿（さお）を持って舟を押すことも難しいお母さんの手助けをしました。川に氷が張る寒い時には、長靴を履いて渡る日もありましたが、お母さんは愚痴もこぼさず、神様のおかげで生活出来ることにお礼を申し上げる毎日でした。

また、手助けをしてもらいながらも、子ども

と一緒にお参り出来たことは、お母さんにとってこの上ない喜びでもありました。それは、直良さんも同じで、親孝行出来る喜びと、お参り出来る喜びを感じました。

教会は、琵琶湖のほとりにあり、庵（いおり）のようなたたずまいです。教会長の岡野すみゑ先生は、明治の頃、三重県熊野に生まれ、厳しい家庭環境に育ちました。やがて滋賀県北里に嫁ぎ、教会で奉仕するようになってからも、冬の早朝、冷たい川に入って修行をせずにはおれない一途な方で、お参りに来る方々の助かりを祈りました。厳しい修行の一方で情も厚く、川の鯉は、温かい先生の周りに集まったというエピソードもあります。

先生は自分は食べる物が無くても、直良さん親子をはじめ、お参りになる方どなたにも、「腹減ってへんか」と気遣い、大事にして下さる方でした。そんな先生は、直良さんにとって、お母さん同様、力強い心の支えでした。

若い頃から、直良さんはバイクや自動車が大好きで、二十二歳ですべての種類の免許を取得しました。免許の試験を受ける前に教会に参拝すると、先生は、「直ちゃん、心配いらん」と励まして下さり、その通り合格しました。

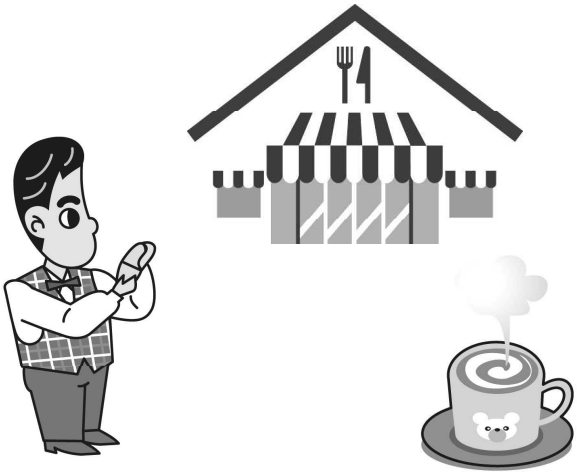
そして、大型車の長距離運転手をしていて大きな事故を起こした時も大事に至らず、また、椎間板ヘルニアと腎臓病が重なった時も、すみゑ先生から、「直ちゃん、大丈夫や、心配いらん」と言葉を掛けてもらいました。手術は八時間にも及び、当初三〇〇〇ccの輸血が必要と言

われていましたが、一〇〇〇ccで済みました。
長い入院生活と食事療法が続き、直良さんは普通食が食べたいと思う毎日でした。内緒で塩昆布を食べて看護士さんに見つかり、また食べては叱られ、そのたびに身体が腫れあがりました。そんな時、すみゑ先生がお見舞いに来て下さり、「直ちゃん、食物は、みんな人の命のために、天地の神様が作り与えて下さるもの。薬だと思って有り難く頂きなさい」との言葉に、直良さんは、「そうだ。病院の食事も薬だと思って有り難く頂こう」と、ベッドの上で祈りながら、食事を頂くようになりました。
やがて退院し、すっかり元気を取り戻し、少しずつ働くことが出来るようになった直良さんは、子どもの頃と同じように、仕事の合間にはお母さんの面倒を見て、一緒に教会にお参りしました。
すみゑ先生は亡くなるまで、直良さん親子を祈り続けて下さり、いつも、「天地の神様は見て下さっているから、どんなことでもお願いするように」と話されました。そしてお母さんは、「リウマチは、神様から徳を積む修行をさせて頂いているんだ」と言い続け、信心一筋で天寿を全うするのでした。直良さんは、そんな二人の信心に導かれ、神様を信じていけば、どんな困難に遭っても、乗り越えていけるという信念を育てられたのでした。
その後、直良さんは結婚し、授かった長男長女も今は独立し、それぞれに信心を受け継いでいます。直良さんは、「今、生かされて生きて

いる喜びに感謝し、お役に立たせて頂き、人を助ければ自分が助かる」と子どもたちに話します。

現代の日本では、様々な問題が人々を苦しめ、自殺する人も年間三万人を超えると言われています。直良さんは、こんな時代こそ、信心することが大切だと語ります。

リウマチに苦しむ毎日を送りながらも、教会参拝を欠かさず、家族のことを祈り続けたお母さん。そして、いつも見守り、祈って下さっていたすみゑ先生に、今日まで信心を育てて頂いたことに感謝の祈りを捧げる直良さんは、今日も家族や地域社会、そして喫茶店ドリームに集まる方々や縁（ゆかり）ある人々の幸せを神様に祈っています。



金光教本部　ラジオ放送係

住 所　〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷３２０

電 話　０８６５-４２-６４５３

FAX　０８６５-４２-２１１４

メール　w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

北海道放送	土曜日 あさ5時10分	中国放送	土曜日 あさ5時50分
東北放送	日曜日 あさ5時00分	南海放送	日曜日 あさ6時00分
ニッポン放送	日曜日 あさ4時30分	RKB毎日放送	日曜日 あさ6時50分
東海ラジオ放送	金曜日 あさ5時25分	宮崎放送	日曜日 あさ7時10分
和歌山放送	日曜日 あさ6時50分		
朝日放送	水曜日 あさ4時50分		
山陽放送	日曜日 あさ6時35分		

こころで聴くおはなし　検索